

# JSCR Newsletter



日本糖質学会会報

JSCR Newsletter published by

The Japanese Society of Carbohydrate Research

## 会長就任にあたって

日本糖質学会 会長 石田 秀治

今年度から2年間（2021年7月から2023年6月まで）、日本糖質学会の会長を仰せつかりました。どうぞ宜しくお願いします。

糖質学会の活動の柱に年会の開催があります。この2年間は、コロナ禍により年会の開催が危ぶまれましたが、昨年は誌上開催（東京、小川温子先生と稲津敏行先生）、今年はハイブリッド開催（鹿児島、隅田泰生先生）と、無事にバトンが繋がりました。両年会の世話人の先生方、並びに門松前会長を始めとする理事会メンバーの方々に、改めて御礼申し上げます。来年は、三善英知先生のお世話により大阪で開催されます。コロナ禍の状況には予断が許されませんが、一昨年までと同様、いやそれ以上の年会になりますよう、会員の皆様のご協力を宜しくお願い致します。

今年（2021年）は、「二刀流」が注目を集めた年でした。本会は、1978年に炭水化物研究会を前身として設立されて以来、1989年に学会組織に移行した後も、「化学」と「生物」を二本柱として発展してまいりました。二刀流の価値を何より認識している学会ですので、今後も二刀流の良さを発揮しながら本会が発展していくことを祈念しています。一方、学問の発展に伴って、従来の枠組みを超えた新しい研究が発展していることも承知しています。その様な新しい潮流にも対応していければと思います。

今年、オリンピックとパラリンピックが開催されましたが、来年2月には冬季オリンピックも開催されます。また、スポーツの話題で恐縮ですが、ノルディック複合（スキージャンプ競技とスキージャンプ競技の複合）の王者は「King of Ski」と呼ばれるそうです。その理由は、相容れない2つの要素（距離競技に求められる持久力とジャンプ競技に求められる瞬発力）を併せ持たなければ得られない栄誉だからだそうです。学会活動に置き換えると、距離競技は地道な人材育成であり、ジャンプ競技は社会にアピールする研究の発展かと思えます。前者に関して言えば、本会には奨励賞、ポスター賞、さらに優秀講演賞が設けられており、若手研究者の奨励、支援を進めています。若手の皆様には、これらの賞に積極的にご応募頂き、本会の益々の発展に貢献頂きたく思います。後者のトピックとしては、門松先生が中心となって進めてこられた「Human Glycome Project」の文部科学省ロードマップ2020への採択があります。このプロジェクト自身は10年を超える地道な取り組みではありますが、これまでの研究の積み重ね（助走）から社会へのアピール（ジャンプ）を果たした事を考えると、ジャンプ競技に例えることができると思えます。大ジャンプだと思います。

学会として、今後も人材の育成と研究の発展をさらに進め、「学会の王者」を目指したいと思えます。

## CONTENTS

■ 会長就任にあたって	石田秀治◎ 1	■ The Carbohydrate Research Award を受賞して	高橋大介◎10
■ 第40回日本糖質学会年会(鹿児島)の報告	隅田泰生◎ 2	■ 事務局報告	
■ 第3回日本糖質学会優秀講演賞	加藤晃一・鈴木匡◎ 5	■ 理事会議事録	◎11
■ 第23回ポスター賞選考結果	平林淳・鈴木匡◎ 6	■ 評議員会・総会報告	◎13
■ 第41回日本糖質学会年会予告	三善英知◎ 7	■ 理事・評議員・名誉会員・顧問・維持会員	◎14
■ 第25回奨励賞受賞候補者募集	平林淳・佐藤ちひろ◎ 9		

## 第40回 日本糖質学会年会(鹿児島)開催報告

世話人代表 鹿児島大学 隅田泰生

第40回日本糖質学会年会は、2021年10月27日から29日の3日間、鹿児島市内の鹿児島県民交流センターにおいて開催されました。2年前に発生した新型コロナが、ここまで大きな影響を全世界に与えるとは想像しておりませんでした。昨年の年会は誌上開催になってしまいましたし、本年も9月上旬までは、第5波の大流行が続いていましたので、世話人会のリモート会議でも、対面での開催は諦めムードがありました。しかし、ギリギリ9月26日まで様子を見たいという私の思いを、理事の皆様、世話人会の皆様が受け止めて下さり、ワクチン接種率と感染の勢い鈍化について注意深く情報を分析し、ハイブリッドの開催を決めました。その後状況は急激に改善しており、決断して良かったと思っています。一方で、決定してから1ヶ月で、ハイブリッド開催のための準備を本格的におこなったため、準備万端とはいえないことも多々あり、皆様に不都合を感じさせてしまうことがあったかと思えます。どうぞ寛容いただきますようお願いします。広報期間が1ヶ月しかなく、かつ、コロナ禍の影響も残っていたにもかかわらず、年会参加登録数417名、鹿児島に292名が来て下さいました(企業展示を含めると、参加者430名、来鹿者305名)。参加いただいた方々に御礼を申し上げます。

2年前、名古屋での第38回年会時に行われた総会で、鹿児島開催を認めていただきました。9年前の2012年にも、世話人代表として第31回年会を鹿児島で開催させていただいており、今回2回目の開催となりました。2012年は、東北大地震の翌年、さらに糖質学会の前事務局から現在の事務局に変わったばかりで、ほぼすべてを鹿児島で行う必要がありました。私も手探り状態でしたが、とにかく来ていただける皆さんに充実した時間を過ごしていただくべく努力いたしました。しかし、会場や懇親会の準備、要旨集の発行などを業者に頼らざるを得なかったこともあり、大きな赤字を出してしまいました。そこで今回は、リベンジをすべく、9年前の教訓を生かし、前回よりもかなり安価な会場を2年前に仮予約を済ませていました。ところが、前述の通りの新型コロナのパンデミックです。昨年末の理事会で、糖質研究の裾野を広げるために、ハイブリッド開催を要望され、万一コロナ禍が収まらなかった時には、リモート学会に即座に切り替えることも容易と考え、準備を始めました。リモートでの口頭発表は問題ないと思いましたが、短時間で100件以上のポスター発表をどのようにすれば活性化できるか、それ



も安価で、を考えました。そして、iPhoneの動画撮影と配信機能を使用して、ポスター発表者のショートスピーチを同時中継することにいたしました。発表件数は、口頭発表75件、ポスター発表137件、優秀講演賞第2次審査の発表6件、奨励賞講演6件(一昨年度の受賞者3名も、今回2年越しで講演していただきました)で、計224件の発表をいただきました。また、特別講演には、門松健治前会長に「生命科学の中のヒューマングライコームプロジェクト」というタイトルで、生命科学として初めて文科省ロードマップ2020に採択された「ヒューマングライコームプロジェクト」についてご講演をいただきました。オールジャパン体制が必須であり、この活動を通して、日本が世界の糖鎖研究を転換しリードし、さらには生命科学変革のきっかけとなろうと、我々を鼓舞いただきました。さらに、男女共同参画事業として、福岡大の塩井(青木)成留美先生に、「日本人女性研究者の意識改革-海外の女性研究者たちは-」というタイトルでご自身の現在進行中のご経験も含めて具体的で、わかりやすくお話をいただきました。



「ポスドクをやっている女性研究者と一緒に聞いていたのですが、彼女はしきりにメモをとっていました。」との声も寄せられています。企業ブースでは、昼休みに企業の方による 10 分間のプレゼンテーションを行っていただき、同時配信いたしました。コロナ禍で生化学会などがすべてリモートになってしまっており、久しぶりに糖質研究の関連企業の技術開発の進行を生でお聞きすることができました。

このように、皆様のおかげで、年會を無事終了させることができました。ポスター会場では、十分なスペースを作ることができたことも良かったと思っています。三密を避けながら、学生さんや若い研究者の皆さんが、喜々として Discussion されているのを見て、やはり学会はこうでなければとの思いを強くしました。理事の先生方や名誉会員の先生方からも「改めましてこのコロナ禍の中、年會を開催いただきありがとうございます。Face-to-face で Science の議論ができるのは、やはり素晴らしい事だと再認識致しました。世話人の先生方のご苦労は本当に大変なことだったと思いますが、改めて御礼申し上げます。」「コロナ禍が信じられない速度で収まり、学会が盛会だったことはまさにご同慶の至りです。世話人代表の先生の前向きな情熱が勝ちましたね。」「対面で年會をやってくれてありがとう。」などメールや直接口頭でお褒めと感謝のお言葉をいただきました。皆さんと共有したいと思います。本年會のテーマとして、2 年間の閉塞状態を破って前へすすむ、その最初の年會にしたいという思いから、「コロナ後の糖質研究：前へ」といたしました。



A会場での口頭発表

ポスター発表時のショートスピーチ  
(オンタイムでWebに配信しました)

皆様には 3 日間充実した時間を共有していただき、目標は達成できたのではないかと考えております。心から感謝申し上げます。

一方で、コロナ禍のため懇親会を計画できなかったことは残念でした。幸い天候に恵まれたので、2 日目の夕方に、会場前の広場にキッチンカーを出してもらい、各自で飲み物と軽食を購入していただき、曲がりなりにも「乾杯」ができたこと、1 時間ほどの短時間でしたが、参加された方々間で情報交換も少しはできたのではないかと、自身を慰めています。幸い、会場は繁華街（天文館）にも近く、コロナ禍による制限も解かれたため、鹿児島名物をご賞味いただけた方も多いかと思います。

第 38 回年會の世話人代表の北島先生が、ニューズレターの年會報告に以下の文章を書かれています。「年會において最も重要なことは、会員が一堂に会し新しい研究成果を発表し、情報交換し合うことにあります。とくに、学生や将来を担う若い研究者とベテラン研究者が渾然一体となって、知識や技術の交換、議論することで、研究の喜びを倍増させ、苦しみを半減させる場となることが大切です。」100% 同意します。今回初めてのハイブリッド開催においてのリモート発信では ZOOM を使用しました。もっと良いソフトがあるのかもしれませんが、今回は最新の研究手法や結果を簡単に記録することも可能でした。年會期間中に、研究者としての倫理をより強く保っていただくことをホームページ等をお願いしましたが、性善説だけで行っていくのは無理だと思います。最新の研究 vs. 秘密保持との関係を今後どうすべきか、糖質学会としてガイドラインを定める必要があると思います。理事会でご検討いただければ幸いです。

本年會でも数多くの団体から共催、後援、協賛をいただきました。また複数の財団、団体、企業からは助成、寄付、展示、広告を通じてご支援いただきました。ここに深く感謝いたします。最後になりますが、本年會の開催準備と運営に快くご協力くださった九州地区の世話人會の先生方、学会事務局と年

## 第 40 回年会

会事務局の皆様、手伝いの鹿児島大学の学生さん達、ライブ配信及び参加・発表登録などの業務を超デイスカウトでお引き受けいただいた業者の皆様により感謝申し上げます。



企業展示における商品紹介プレゼンテーション風景（Webで同時配信しました）

## 第3回 日本糖質学会優秀講演賞選考結果

授賞選考委員 優秀講演賞担当 加藤 晃一  
鈴木 匡

日本糖質学会は日本糖質学会優秀講演賞を2018年度に新設いたしました。応募資格者は本会の学生会員または32歳未満の正会員であり、発表内容、発表法、質疑応答において優れた講演を行い、今後、糖質科学の発展に寄与すると期待される方です。また本賞は研究テーマや所属研究室を審査対象とするものではなく、グループ研究の場合は発表者の貢献が大きいことが認められる場合に限っています。

日本糖質学会優秀講演賞募集は書類選考と優秀講演者発表会場での発表審査の2段階選抜方式をとっています（詳細は、糖質学会のHPでご確認ください：<http://www.jscr.gr.jp/?p=contents&id=18>）。書類選考においてはライフイベントなどについても考慮され、口頭発表においては一般講演に比べ長い質疑時間が与えられます。日本糖質学会優秀講演賞受賞者は、JSCR ニュースレター誌上にて発表し、翌年の総会にて表彰します。二次審査において発表を行ったファイナリストの方々に対してはファイナリスト証を発行します。

本年度は第40回日本糖質学会（2021年10月27～29日（鹿児島）：隅田泰生代表世話人）において、一次選考を通過したファイナリスト6名が口頭発表を行いました。授賞委員会が厳正なる選考を行い、その後理事会の議を経て、下記2名の方々を受賞者と決定いたしました（敬称略）。表彰は、2022年度総会（2022年9月29日～10月1日の第41回年会（大阪）中に開催）にて行う予定です。惜しくも選に漏れた方々の発表も素晴らしいものでした。次回年会でも多数の申し込みと活発な質疑を期待しております。

野村幸汰（大阪大学大学院理学研究科 博士課程3年）  
「化学的糖鎖挿入による糖タンパク質精密合成」

福永嵩大（九州大学大学院生物資源環境科学府 博士課程2年）  
「分裂酵母における全ガラクトース転移酵素の機能解析」

(50音順)

## 第 23 回日本糖質学会ポスター賞（今年度の選考結果について）

授賞選考委員 ポスター賞担当 平林 淳  
鈴木 匡

本賞は日本糖質学会におけるポスター発表者で 35 歳以下の会員の中から 4 件程度を選び、「日本糖質学会ポスター賞」として表彰し、副賞としてシアル酸研究会からの賞金を贈呈するものです（詳細は、糖質学会ポスター賞規定をご覧ください。<http://www.jscr.gr.jp/?p=contents&id=18>）。本年度は第 40 回日本糖質学会（2021 年 10 月 27～29 日、鹿児島において隅田泰生代表世話人のもと開催）のポスターセッションの演題の中から、予め発表申し込み時点で申請のあった 52 題（全発表件数 138 題）を対象に、発表要旨、ポスターの出来栄、発表内容および質疑応答などの諸点を踏まえ、選考委員（評議員全員が資格を保持）による投票を行い、授賞選考委員が事務局員立ち会いのもと厳正に開票・集計を行いました。本賞は若手研究者の奨励を強く支援することを主眼とするものですが、今回、コロナ禍という大きな制限の中で頑張った成果発表であること、昨年（第 39 回大会（東京）が誌上開催となりポスター発表がなくなった点なども考慮し、今年（第 40 回大会）は下記 7 名の方々を受賞者と決定いたしました（敬称略）。表彰は、2022 年度総会（2022 年 9 月 29 日～10 月 1 日の第 41 回年会中に開催）にて行う予定です。ポスター発表のレベルが年々高まり、惜しくも選に漏れた方々の発表もすばらしいものでした。次回年会でも会員の皆様多数の申し込みをお願いいたします。最後に、3 日間に亘り選考にあたって下さった選考委員の方々に改めて御礼申し上げます。

## 【生物系】

宋万里（東北医科薬科大学分子生体膜研究所）

「SLC35AC の O-GlcNAc 修飾は N-型糖鎖の  $\beta$  1, 4-GlcNAc 分岐を制御する」

富田晟太（岐阜大学大学院自然科学技術研究科）

「フコース転移酵素 FUT8 の機能制御における OST の役割」

武渕明裕夢（東京農工大学大学院農学府）

「発生期の脳皮質で形成されるヒアルロン酸を含む細胞外マトリックスの解析」

村井良（名古屋大学大学院生命農学研究科）

「脊椎動物種間におけるポリシアル酸転移酵素 ST8Sia2 のキメラ化による酵素活性の比較」

## 【化学系】

芝田大之（大阪大学大学院理学研究科）

「新規ワンポット法による糖タンパク質の化学合成と糖鎖の特異的水和の機能解明研究」

濱島将伍（岐阜大学大学院連合農学研究科）

「完全な立体選択性を示す Kdo  $\alpha$ -グリコシル化法の開発研究」

三浦彩音（大阪大学大学院理学研究科）

「生細胞表面への合成糖鎖の導入及び糖鎖-レクチン相互作用の分子化学的解析」

(50 音順)

第 41 回 日本糖質学会年会（大阪）開催予告

世話人代表 大阪大学 三善英知

第 40 回 日本糖質学会年会は 2021 年 10 月 27 日～29 日、代表世話人である鹿児島大学 隅田泰生先生のご尽力で、かごしま県民文化ホールにて久しぶりの対面形式の学会として開催され、大変盛り上がりました。新型コロナウイルスの第 5 波がいつまで続くかという不安の中、大会に合わせたかのように直前から患者数も減少し、コロナ後の糖質研究：前へというキャッチフレーズがまさに的中したという印象がありました。この勢いに乗って、ぜひ第 41 回の年会も盛り上げて行きたいと思えます。

大阪で年会が開催されるのは、2013 年の第 32 回年会（大阪大学大学院理学研究科 深瀬浩一先生が代表世話人）以来になります。第 40 回年会の特別講演では、名古屋大学の門松健治先生によってヒューマングライコームプロジェクトの紹介があり、今後の糖鎖研究には異分野融合研究が必須であると強調されました。そこで第 41 回の年会では「糖鎖研究の新しい潮流と未来」というテーマをかかげ、以下のような企画を考えています。

まず、特別講演では大阪大学医学系研究科の忽那賢志先生による「COVID-19 の現状と with コロナ時代の学会のあり方（仮題）」というトピックスと、大阪大学統括理事の金田安史先生による「ホンモノの基礎研究から社会実装へ（仮題）」という夢のある講演を考えています。糖鎖研究の新しい潮流と異分野融合研究を意識して、4 つのワークショップ（シンポジウム）を企画しました。1 つ目は、現在大型糖鎖研究 (AMED-CREST, PRIME) として進行中の「プロテオスタシスの理解と革新的医療の創出」の紹介、2 つ目は保健学科（臨床検査）が主催することを意識した「糖鎖バイオマーカーの開発とその利用」、3 つ目は糖鎖化学と生物学の融合を目指した「糖鎖化学の技術革命とバイオロジーへの新展開」、そして 4 つ目が「糖鎖研究への応用が期待できる最先端の基礎研究」であります。

以上の企画に加えて、例年どおりの口頭発表、優秀講演賞候補者による講演/奨励賞受賞講演を行います。毎年、年会で盛り上がるポスター発表に関しては、COVID-19 を意識しながら、十分にスペースを確保して行いたいと考えております。そして本年会の特別企画として、大きな医学研究のテーマである「がんと精神疾患」に関して、大阪大学関連の臨床医学の教授に教育講演をしていただき、教科書に書かれていない本当の疾患の病態やアンメットニーズに関して勉強できるランチョンセミナーを企画しています。また、男女共同参画関連講演では、国際化、子育て、研究教育職などを意識して講師を選定する予定にしております。

2022 年の秋、新型コロナウイルスによる社会状況がどのようになっているか予想できませんが、できる限り参加者の皆様が楽しめる懇親会も企画したいと思えます。現段階でエクスカージョンの企画は難しそうですが、最終日は余裕を持ったスケジュールにしており、有志で週末の関西を楽しんでいただこうと考えています。最後になりましたが、本年会期間が 2022 年度の日本癌学会総会の開催日に重なったことを深くお詫び申し上げます。この日程でしか、大阪大学の会場を確保することができませんでした。第 41 回日本糖質学会年会が起点となり、コロナ後の糖質研究が未来に飛躍できるよう、組織委員の総力をあげて準備を進めていきたいと考えております。ぜひ久しぶりの関西での日本糖質学会年会をお楽しみください。

**年会についての最新情報は、学会ホームページ(HP) (<http://www.jscr.gr.jp>) の年会専用ページに掲載します。**

**会期** 2022 年 9 月 29 日（木）～ 10 月 1 日（土）

**会場** 大阪大学 コンベンションセンター

保健学科講義棟

(〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1)

**討論主題（予定）**

**内容** 特別講演、日本糖質学会奨励賞受賞講演、男女共同参画関連講演、ワークショップ、一般講演とポスター発表など

(1) 口頭発表 A (20-25 分、PC による発表) 1 研究室当たり 1 発表。

(2) 口頭発表 B (12-15 分、PC による発表) 研究室当たりの発表数に制限なし。

(3) ポスター発表 研究室当たりの発表数に制限なし。採否は組織委員会に一任。

**参加・発表申込み**：申込方法、発表方法の詳細は、2022 年 4 月中に学会 HP (<http://www.jscr.gr.jp>) の年会専用ページに掲載。ただし、発表は学会会員に限ります

**発表申込み期間（予定）** 2022 年 5 月 1 日～ 7 月 10 日

発表採択の通知：発表受付終了後、1 ヶ月程度で演者に e-mail で通知。

**参加登録料**

< >内は 2022 年 8 月 15 日以降申込の金額。

## 年会予告

---

日本糖質学会正会員： 7,000 円 <9,000 円>  
日本糖質学会学生会員： 2,000 円 <4,000 円>  
一般： 9,000 円<11,000 円>  
一般学生： 3,500 円 <4,000 円>

ただし、共催・協賛・後援の学会の規程で、糖質学会員と同額の参加登録料で参加できる規程があり。  
**託児室** 会期中、大阪大学近くのプライベートな託児所/保育施設に委託予定。

第 25 回日本糖質学会奨励賞 受賞候補者募集

授賞選考委員 平林 淳  
佐藤 ちひろ

第 25 回日本糖質学会奨励賞受賞候補者の選考を開始します。

**受賞候補者の資格：**糖質科学の分野で優れた研究成果を挙げた満 40 歳以下（2022 年 7 月 1 日現在）または学位取得後 10 年以内の研究者で、2020 年 7 月 1 日以前から継続して本会会員であること。ただし、出産、育児、介護のようなライフイベントを考慮する。

**日本糖質学会奨励賞募集の方法：**以下に示す 2 段階で行われます。

1. 本会会員による候補者の推薦

会員は、自薦、他薦を問わず候補者 1 名を推薦できます。氏名、所属機関・研究室名と所在地、TEL/FAX、メールアドレス、A4 用紙 1/2 程度の業績の説明文、代表的な発表論文 2 ないし 3 報（タイトル、氏名、雑誌名、掲載年）を A4 判に記し、封筒の表に「奨励賞候補者推薦書類」と明記し本会事務局まで郵送、あるいは、同内容を jscr.office@gmail.com までメールでお送り下さい（メールの場合、事務局からの受理通知を確認してください）。

締切：2022 年 2 月 4 日（金）（必着）

2. 授賞選考委員会による候補者の選出

理事会にて選出した委員による授賞選考委員会が、会員からの被推薦者中から原則として 10 名以内の候補者を選び、候補者本人に下記応募書類（1～4）の事務局への提出を依頼します。

**応募書類**（候補者本人から提出）：

- 1) 所定の様式の応募書類（本会事務局より候補者本人に送付）
- 2) 研究概要の紹介本文（図表を含めて A4 用紙 3 枚以内厳守）
- 3) 関連論文リスト A4 用紙に著者（本人に下線）、論文題目、誌名、巻、ページ（初めと終わり）、掲載年を記載
- 4) 主な論文 3 編以内の別刷りもしくはその写しを各 1 部

**選考と発表の方法：**選考は授賞選考委員会にて行い、受賞者は理事会にて決定後に JSCR ニュースレター誌上に発表し、表彰は総会（第 41 回日本糖質学会年会（大阪）；2022 年 9 月 29～10 月 1 日）にて行う予定です。

**提出先：**

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町 1-38-12 油商会館 B 棟 3 階  
日本糖質学会事務局 福田公江  
問合せ：e-mail：jscr.office@gmail.com、電話：03-5642-3700

## The Carbohydrate Research Award を受賞して

慶應義塾大学理工学部 高橋大介

この度、栄えある“The Carbohydrate Research Award”を与えていただき、大変光栄に思っております。この賞は、Carbohydrate Research 誌の出版者と編集者によって、2001年に設立された国際的な賞です。受賞対象者は、博士の学位(Ph. D.)取得後15年以内の研究者であり、隔年で受賞者が選ばれています。過去の受賞者リストには、世界中で活躍されている著名な先生方が名を連ねており、今後より一層頑張らなければと身の引き締まる思いであります。まずは、本賞の推薦の際に、大変丁寧かつ貴重なコメントを頂戴した Shang-Cheng Hung 先生、Lowary 先生、伊藤幸成先生、深瀬浩一先生、梶原康宏先生、および野上敏材先生に心より御礼申し上げます。さて、今回の受賞の対象となった研究は、有機ホウ素化合物を用いた1,2-cis 立体選択的グリコシル化法の開発と応用でしたので、本グリコシル化反応の開発に至った経緯について、簡単に記述させていただくとともに、謝辞を述べさせていただきたいと思っております。

私は、2000年に、東京工業大学の高橋孝志先生の研究室に配属された時からグリコシル化反応の開発と糖質合成に関する研究に携わってきました。高橋孝志先生には、研究の魅力だけでなく、研究者として生きていくためのノウハウを実践的に教えていただきました。有機合成化学に関する知識や技術は、当時、スタッフであった土井隆行先生と田中浩士先生をはじめ、多くの博士・修士の先輩方から教えていただきました。当時の高橋・土井研では、天然物を主とし、脂環式化合物、ペプチドおよび糖質など様々な有機化合物の合成に取り組んでいましたので得るものは本当に多く、自分にとって非常に良い鍛錬の場であったと思っています。2006年に博士の学位を取得した後は、デンマークにあるカールスバーグ研究所の Ole Hindsgaul 先生のもとで、博士研究員を経験する貴重な機会を得ました。その際、ボロン酸を用いた糖鎖認識に関する研究テーマをいただいたことは大変幸運でした。なぜなら、私は、この



当時、有機ホウ素化合物の知識がなかったため、基礎から必死に勉強し、研究に活用しようと悪戦苦闘したわけですが、その際に習得したボロン酸-糖鎖間相互作用に関する知識と経験が、現在の研究の礎の一つになっているからです。その後、2008年に、慶應義塾大学の戸嶋一敦先生の研究室の助教として着任しましたので、ボロン酸を用いたケミカルプローブの開発を軸に研究を進めました。その後、ボロン酸を分子認識だけでなく、糖鎖合成用の触媒として活用できないかと考えたことがきっかけで、今回の研究テーマを着想するに至りました。その後、本研究は、慶應義塾大学理工学部応用化学科・分子生命化学研究室で行われました。この間、松村秀一先生、故梶英輔先生、および共同研究者の皆様からは、様々な面で有益なご助言とサポートをいただきました。研究室主宰者である戸嶋一敦先生には、本研究を自由に展開することを認めていただいただけでなく、着任時より、あらゆる面で大変丁寧なご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

これまで温かくご指導・サポートいただいた先生方、共同研究者の皆様、そして共に研究に取り組んできた研究室の学生の皆さんに心より感謝申し上げます。今後、今回の受賞を励みにして、糖質科学の発展のため、より一層努力して参りたいと思っております。

**令和3年度役員(任期 2021. 7. 1~2022. 6. 30)**

会長 石田 秀治

副会長 北島 健

理事 安藤 弘宗

梶原 康宏

加藤 晃一

蟹江 治

木下 聖子

佐藤 ちひろ

鈴木 匡

平林 淳

藤本ゆかり

本家 孝一

監事 門松 健治

深瀬 浩一

梶原 康宏 大阪大学大学院理学研究科

梶本 哲也 立命館大学総合科学技術研究機構

片山 高嶺 京都大学大学院生命科学研究所

加藤 敦 富山大学附属病院薬学部

加藤 啓子 京都産業大学生命科学部

加藤 晃一 自然科学研究機構生命創成探究センター

門松 健治 名古屋大学大学院医学系研究科

金川 基 愛媛大学大学院医学系研究科

金森 審子 東海大学工学部

蟹江 治 東海大学工学部

鎌田 佳宏 大阪大学大学院医学系研究科

亀井加恵子 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科

亀山 昭彦 産業技術総合研究所創薬基盤研究部門

川崎 ナナ 横浜市立大学大学院生命医科学研究科

川島 博人 千葉大学大学院薬学研究科

北岡 本光 新潟大学農学部

北川 裕之 神戸薬科大学薬学部

北島 健 名古屋大学生物機能開発利用研究センター

北爪しのぶ 福島県立医科大学保健科学部

木塚 康彦 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

木下 聖子 創価大学理工学部

木村 吉伸 岡山大学大学院環境生命科学研究科

顧 建国 東北医科薬科大学分子生体膜研究所

神田 大輔 九州大学生体防衛医学研究所

小島 直也 東海大学工学部

近藤 昭宏 株式会社日吉

佐藤あやの 岡山大学工学部

佐藤 武史 長岡技術科学大学生物系

佐藤ちひろ 名古屋大学生物機能開発利用研究センター

佐藤 智典 慶應義塾大学理工学部

篠原 康郎 金城学院大学薬学部

島本 啓子 公益財団法人サントリー生命科学財団

清水 史郎 慶應義塾大学理工学部応用化学科

清水 弘樹 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門

須貝 威 慶應義塾大学薬学部

鈴木 匡 理化学研究所開拓研究本部

隅田 泰生 鹿児島大学大学院理工学研究科

高橋 素子 札幌医科大学医学部

竹内 英之 静岡県立大学薬学部・大学院薬学研究院

竹川 薫 九州大学大学院農学研究院

武田 陽一 立命館大学生命科学部

竹松 弘 藤田医科大学医療科学部

舘野 浩章 産業技術総合研究所糖鎖医工学研究センター

田中 克典 理化学研究所開拓研究本部

田中 浩士 東京工業大学物質理工学院

田村 純一 鳥取大学農学部

千葉 靖典 産業技術総合研究所生命工学領域研究戦略部

**評議員 (任期 2021. 7. 1~2022. 6. 30)**

相川 京子 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系

赤井 昭二 女子栄養大学応用有機化学研究室

秋吉 一成 京都大学大学院工学研究科

芦田 久 近畿大学生物理工学部

天野 純子 (公財)野口研究所糖鎖生物学研究室

荒田洋一郎 帝京大学薬学部

安藤 弘宗 岐阜大学糖鎖生命コア研究所

池田 義孝 佐賀大学医学部

池原 譲 千葉大学大学院医学研究院・腫瘍病理学

石田 秀治 岐阜大学応用生物科学部・生命の鎖統合研究センター

石水 毅 立命館大学生命科学部

和泉 雅之 高知大学教育研究部

板野 直樹 京都産業大学生命科学部

一柳 剛 鳥取大学農学部

伊藤 孝司 徳島大学大学院医歯薬学研究部

糸乗 前 滋賀大学教育学部

井原 義人 和歌山県立医科大学医学部

岩淵 和久 順天堂大学大学院医療看護学研究科

上村 和秀 中部大学生命健康科学部

浦島 匡 帯広畜産大学畜産学部

大谷 克城 酪農学園大学農食環境学群

大坪 和明 熊本大学大学院生命科学研究所

大橋 貴生 摂南大学理工学部生命科学科

岡 昌吾 京都大学大学院医学研究科

岡島 徹也 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・医学系研究科

越智 里香 高知大学教育研究部

柿崎 育子 弘前大学大学院医学研究科

角田 佳充 九州大学大学院農学研究院

笠原 浩二 東京都医学総合研究所

梶谷内 晶 創価大学理工学研究科  
 戸嶋 一敦 慶應義塾大学理工学部  
 戸谷希一郎 成蹊大学理工学部  
 豊田 英尚 立命館大学薬学部  
 豊田 雅士 東京都健康長寿医療センター研究所  
 中川 優 名古屋大学糖鎖生命コア研究所  
 中北 慎一 香川大学総合生命科学研究センター  
 中野 博文 愛知教育大学自然科学系化学  
 中の三弥子 広島大学大学院統合生命科学研究科  
 中山 淳 信州大学医学部  
 長束 俊治 新潟大学理学部  
 西河 淳 東京農工大学大学院農学研究院  
 西島 謙一 名古屋大学生命農学研究科  
 西田 芳弘 千葉大学大学院園芸研究科・応用生命化学領域  
 西村紳一郎 北海道大学大学院先端生命科学学院  
 野上 敏材 鳥取大学大学院工学研究科  
 羽田 紀康 東京理科大学薬学部  
 花島 慎弥 大阪大学大学院理学研究科  
 原田陽一郎 大阪国際がんセンター研究所  
 東 伸昭 星薬科大学薬学部  
 比能 洋 北海道大学大学院先端生命科学研究院  
 平井 剛 九州大学大学院薬学研究院  
 平林 淳 名古屋大学糖鎖生命コア研究所  
 深瀬 浩一 大阪大学大学院理学研究科  
 伏信 進矢 東京大学大学院農学生命科学研究科  
 藤本ゆかり 慶應義塾大学理工学部  
 藤山 和仁 大阪大学生物工学国際交流センター  
 古川 圭子 中部大学生命健康科学部  
 古川 潤一 北海道大学大学院医学研究院  
 北條 裕信 大阪大学蛋白質研究所  
 保坂 善真 鳥取大学農学部  
 細野 雅祐 東北医科薬科大学分子生体膜研究所  
 本家 孝一 高知大学医学部  
 松尾 一郎 群馬大学大学院理工学府  
 松岡 浩司 埼玉大学大学院理工学研究科  
 松野 健治 大阪大学大学院理学研究科  
 眞鍋 史乃 星薬科大学薬学部  
 萬谷 博 東京都健康長寿医療センター研究所  
 三浦 佳子 九州大学大学院工学研究院  
 水野 真盛 (公財)野口研究所糖鎖有機化学研究室  
 三苫 純也 九州保健福祉大学生命医科学部  
 宮西 伸光 東洋大学食環境科学部  
 三善 英知 大阪大学大学院医学系研究科  
 門出 健次 北海道大学大学院先端生命科学研究院  
 矢部 富雄 岐阜大学応用生物科学部  
 山口 拓実 北陸先端科学技術大学院大学  
 山口 真範 和歌山大学教育学部

山口 芳樹 東北医科薬科大学分子生体膜研究所  
 山地 俊之 国立感染症研究所細胞化学部  
 山田 修平 名城大学薬学部・病態生化学研究室  
 山本 一夫 東京大学大学院新領域創成科学研究科  
 湯浅 英哉 東京工業大学大学院生命理工学研究科  
 横山 三紀 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科  
 渡辺 秀人 愛知医科大学分子医科学研究所

### 名誉会員

池中 徳治	石戸 良治	伊東 信
伊藤 幸成	稲津 敏行	遠藤 玉夫
小川 智也	小川 温子	笠井 献一
川寄 敏祐	木曾 真	木下 タロウ
木全 弘治	楠本 正一	木幡 陽
鈴木 明身	鈴木 邦彦	鈴木 茂生
鈴木 康夫	谷口 直之	成松 久
西原 祥子	橋本 弘信	長谷 純宏
古川 鋼一	村松 喬	山形 達也
山本 憲二		

### 顧問

一島 英治

### 維持会員

協和発酵キリン (株)  
 (一財) 杉山産業化学研究所  
 (株) スディックスバイオテック  
 住友ベークライト (株)  
 生化学工業 (株)  
 DSP 五協フード&ケミカル (株)  
 東京化成工業 (株)  
 長良サイエンス (株)  
 (公財) 野口研究所  
 (株) 伏見製薬所  
 松谷化学工業 (株)  
 (株) ヤクルト  
 理研ビタミン (株)

JSCR Newsletter (日本糖質学会会報) Vol. 25, No. 2

2021年12月25日 発行

編集兼発行 日本糖質学会

会長 石田 秀治

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-38-12

油商会館3F

TEL: 03-5642-3700

FAX: 03-5642-3714

JSCR Newsletter 編集委員会

石田 秀治

蟹江 治

本家 孝一